

# ネットワークで地域を耕す！

## ～星と風のカフェと 国立天文台～

松崎 伸一（三鷹はなの会 事務局長）  
縣 秀彦（国立天文台 天文情報センター）

福祉施設の認知度アップと障がい者の自立が目的の事業から、天文台とのコラボレーションが始まり、福祉と天文・科学の新しいネットワークの誕生。そして、地域資源をさらに掘り起こして、地域の活性化を目指している。

### 1. 実践対象

福祉に関心がある層はもちろん、今まであまり関わることのなかった人々、一般市民。天文や科学に興味のある人、または、潜在的に関心をもっている人。そして障がい当事者。

### 2. 実践可能な場所、必要な道具や準備

まずは、人の集う場所。比較的人の流れから離れた場所にある福祉ショップを、街の中心に設定し、集客力を上げるために付加価値を加える

### 3. 福祉と科学で地域を耕す

#### 3.1. 障がい者の工賃アップと自主製品販売の限界、そして天文台とコラボレーション

従来の方法では限界のあった福祉施設の自主製品販売（そこで働く障がい者の工賃アップ）に、アンテナショップという販路を作り、さらにより多くの人に訪れてもらう方法を模索した結果、三鷹市内にこれと結び付く社会資源がないか考えた。その結果、古くから三鷹にある社会資源のひとつとして国立天文台を発見。国立天文台を通して福祉と科学のコラボレーションを企画した。そして、2008年7月7日、『星と風のカフェ』がオープン、同年の11月に『星と風のサロン（サイエンスカフェ）』がスタートした。

現在、『星と風のカフェ』は三鷹市内近郊22か所の障がい者福祉施設で構成されている『ぴゅあネット事業（＝三鷹市障がい者福祉施設等自主製品開発・販売ネットワーク事業）』のアンテナショップとして機能している。運営は、三鷹市から事業委託を受けNPO法人三鷹はなの会が行っている。

始めてみると、予想以上に相互にメリットがあった。天文学のエッセンスを自主製品に加えることで付加価値が付き、福祉にかかわることのなかった人々がお店を訪れるようになった。また、福祉のポリシーは天文学会にも共通項目でもあり、地域に根差した情報提供とコミュニケーションの“場”を安定供給されることになった。そして何より、お互いの目的達成のために協働し、地域の資源をも掘り起こすことができる。この新しいネットワークで地域を耕していき、“福祉＝やさしさ”の認識を広め、サイエンスカフェという“場”の継続が期待できる。

### 3.2. 画像、写真について



写真1 天文台とのコラボ商品第一号(1) 月の満ち欠けクッキー



写真2 天文台とのコラボ商品第一号(2) 星と風のクッキー



写真3 目印は、この星のオブジェ



写真4 店内の様子1. (お店の入り口付近)



写真5 店内の様子 2. (棚に陳列された商品)



写真6 店内の様子 3. (テーブルの上に陳列された商品)



写真7 天文台コーナー(天文台関連商品)



写真8 星と風のサロン

#### 4. 実践上役立つヒントや留意点

- ◆ まずは、場所。出来れば、足を運びやすい立地条件であることが望ましい。
- ◆ 福祉側にとっても、また、天文やサイエンスカフェ等で活動を考えている人にとっても地域の資源を活用し、異業種間のコラボレーションを行うことで、相互にメリットが生じる

#### 5. 実践例の評価

- ◆ 福祉ショップとしては、市内すべての福祉施設の自主製品が展示販売されており、新しい取り組みとして注目されている。
- ◆ 天文台とのコラボにより、通常とは異なった宣伝手法が考えられ、また、来店客層も広がった。
- ◆ 自主製品作りにおいても、テーマに月や星を取り入れることによってオリジナル性の高い商品を企画す

ることが出来、天文ファンだけでなく一般の来店客にも好評。

(『月の満ち欠けクッキー』、『太陽の黒点クッキー』等)

- ◆ 天文台としても、天文の普及活動の拠点のひとつとなり、また、福祉とのコラボレーションにより、サイエンスカフェの継続的運営におけるベースとなっている。
- ◆ お互いのメリットを活かしつつ継続していくためには、どちらかの活動に偏ることなく、お互いの役割分担を明確にすることが大切。

## 6. 一般市民への天文学教育普及活動へのフィードバック

自主製品のアンテナショップを、あえて福祉カラーを前面に出さずに、天文台とコラボレーションで展開することによって、一般市民が抵抗なく福祉や天文にかかわるきっかけとなっており、そこからあらたな興味や行動が広がっていく様子を感じる。

- ◆ たまたま立ち寄ってみたら、並んでいる商品が障がい者の作った商品と知る。丁寧に作られた商品を購入し、障がい者の自立について考えるきっかけとなった。
- ◆ 一方、毎週のように人が集まっている様子を見かけ、サイエンスカフェという存在を知り、参加するようになった。天文台が気軽に見学できることを知り、足を運び、積極的に天文を学ぶようになった。
- ◆ サイエンスカフェには500円分の商品購入チケットが付いているので、商品を購入することが福祉貢献に繋がることを理解する。

## 7. 今後の展開

今後は、より豊かなオリジナルな自主製品を共同で開発し、障がい者の工賃アップにつなげたい。中でも、天文台とのコラボレーションを深めて、より天文・科学にちなんだ商品開発をしたい。三鷹の地域になかで、福祉と天文の活動拠点として展開し、楽しくて・美味しい地域づくりを目指したい。